十八世紀初期フランスとメゾン・ド・プレザンス

フランス・ドイツ啓蒙主義建築思潮研究 その1

THE EARLY 18TH CENTURY FRANCE AND MAISON DE PLAISANCE

—A study on the trend of architectural thought between France and Germany

in 18th century enlightenment Part 1—

市川 秀和*

Hidekazu ICHIKAWA

In this paper, I tried to make clear the historical meanings and functions of “maison de plaisance”, that was a country house-style of late baroque-rococo in France and Germany. From this viewpoint, one can say that the remarkable book is “De la distribution des maisons de plaisance et de la décoration des édifices en général (2.vol.,1737-38)” of Jacques-François Blondel(1705-1774), who was one of the most important French architectural theorists in the 18th century.

The notion of “maison de plaisance” is connected with “bienséance(convenance)”, “commodité”, “distribution”, “économie” and “variété”. They make the turning point of architectural thought from 17th century to 18th century. In other words, the “maison de plaisance” also characterizes one of social changes in the “Ancien Régime”.

Firstly, I treat of the problem of the original notion of “maison de plaisance” in France.

Secondly, I discuss the adoption of “maison de plaisance” in Germany.

In conclusion consequently, I publish to more profound investigation of the transformation in architectural thought between France and Germany.

Keywords : Maison de plaisance, Bienséance, Variété, J.-F.Blondel, Late baroque, Rococo

メゾン・ド・プレザンス, ビアンセアンス, ヴァリエテ, ブロンデル, 後期バロック, ロココ

1. はじめに——バロック・ロココの再評価をめぐって

ヨーロッパ美術史学の確立に、ドイツ人学者による建築史研究の果たした役割は頗る大きい。殊にここで問題とするバロック・ロココへの再評価については、それがその研究成果から生まれ出たといっても過言ではない。ひとまず再評価の過程を概観し、その特徴を指摘することから本研究の導入としたい。

周知のように、十八世紀中期ドイツの著名な美術史家ヴィンケルマンの古典古代への視座は、新古典主義の幕開けを告げるものであり、同時に前時代のバロック・ロココに対する明らかなアンチテーゼでもあり、後世に深い影響を及ぼした。美術史における古典古代の優位な立場は、その後ブルクハルトのルネサンス研究を頂点として、十九世紀後半のドイツにおける学問興隆期においても明らかに不動であった。つまりそれ以外の時代の美術に関しては十分な認識がなされていなかったのである。しかしこのような美術史研究の本流から新たな転起が芽生えた。ブルクハルトはその『一建築家への書簡』に見るように、1875年4月のローマにて「バロックに対する私の敬意の気持ちは、絶えず大きくなっている。」¹⁾と、高まる熱い心情を吐露せずにはおれなかった。またこの前後には、ツァーン(1873)²⁾やドーム(1878)³⁾のバロック・ロココに関する論文が著わされた。それに続いて80年代には、ヴェルフリンの『ルネサンス

とバロック』(1888)⁴⁾とグルリットの『バロック・ロココ・新古典主義様式の歴史』(全三巻,1887-89)⁵⁾が出版される。ここで注目されるのは、ヴェルフリンとグルリットはともに偉大なルネサンス大家のブルクハルトとリュブケ⁶⁾のそれぞれの高弟であったことである。さらに90年代のリーグル(1894-)⁷⁾やシュマルゾウ(1897)⁸⁾の研究が出来て、十九世紀末にはバロック・ロココの再評価の基礎が固まったと見てよい。またこうした学問研究と相関して時代の建築物に対する嗜好は、ベルリンの帝国議事堂(1884)やベルリン・ドーム(1894)を代表としてネオ・バロックに向けられた。まさに「建築がいわばバロック理解のための最初の橋渡しとなった」⁹⁾と評される所以である。そして二十世紀に入って続々とバロック・ロココの研究文献が著わされ、その考察の切り口も実に多様である。つまりギーディオン(1922)¹⁰⁾やベーン(1922)¹¹⁾、フライ(1924)¹²⁾、ペヴスナー(1924)¹³⁾、ゼーデルマイヤー(1925, 1930)¹⁴⁾などの錚々たる研究者によって、20年代¹⁵⁾は絶頂期をむかえた。これらの内容は現在でも決して色褪せてはいないと思われる。

さらにバロック・ロココの再評価でいま一つ触れておきたいのは、作品としての建築物を考察対象とした以上の研究が専ら主流であったのに対して、「建築書」に基づいた諸概念の考察による建築思潮研究についてである。確かにヴェルフリンやシュマルゾウ、ギーデ

本稿は、平成10年8月日本建築学会北陸支部大会において、「十八世紀ドイツにおけるフランス古典主義の影響に関する建築思潮研究」として発表したものの一部を基に、その後の知見を加えて、大幅に加筆・修正を施してまとめたものである。

* 福井大学工学部建築建設工学科 助手・博士(工学)

Research Assoc., Dept. of Architecture and Civil Engineering, Faculty of Engineering, Fukui University, Dr. Eng.

イオンには美的概念や空間論の考察が既にあるものの、「建築書」は殆ど注目されていない。だからこそ敢えて「建築書」に着目し、ヨーロッパ近代の大転換期を背景とするバロック・ロココの建築思想の根幹へ、本質概念の究明を通じて迫っていく「建築思潮研究」が考え出されたのである。かかる建築思潮研究の嚆矢とは、1909年にクルト・カッシーラーが当時ベルリン大学教授のヴェルフリンに提出した学位論文「1650年から1780年までのフランス建築理論家における美的主要概念」¹⁶⁾である。これは全体で八十頁程度の分量なものの、フランスの種々の建築書をほぼ系譜的に網羅し、そこから重要な美的概念を抽出・考察し、この激動する思想期の変遷を的確に性格づけた質の高い内容を持つものである。さらにこのカッシーラーに触発されて1924年には、後に革命的建築家の研究で世界的に知られるあのカウフマンが、最初の論文「フランスの古典主義と新古典主義の建築理論」¹⁷⁾を発表した。またこうしたフランス研究に対して、1916年のハービヒトの論文「十七・十八世紀ドイツの建築理論家」¹⁸⁾も見落とせない。この致少ない成果から「西洋建築思潮研究」の基礎的な視座なり方法が提示されたのである¹⁹⁾。

その後の戦後から現在に到るまでの動向に最早敢えて言及するまでもなからうが²⁰⁾、以上のように大別して「建築作品」と「建築書」を扱った二つのアプローチによる研究成果を基に、バロック・ロココの究明が着実に大きく進展したなかで、実は「建築書」を対象を絞った「建築思潮研究」には、より新しい成果の出来が遺憾ながら少なかったと言わざるをえない。故に既に触れたカッシーラーやカウフマン、ハービヒト、そして森田や白井などの研究は、今日の西洋建築思潮研究を遂行する上で重要な意義をもつと思われる。

従って本研究では、十八世紀の後期バロック・ロココにおけるフランスとドイツをめぐる建築思潮研究を試みたい。そこでこの研究を遂行する有効な考察対象の一つとして、「メゾン・ド・プレザンス Maison de plaisance」と称する、フランスで確立した私的な別荘に着目し、種々の建築書を通した思潮史的意義を究明するとともに、ドイツに与えた影響について考察する。ただしこの私的な別荘の源流にも窺がるイタリアで成立した「ヴィッラ Villa」との関連については、全ヨーロッパ史的視座をも必要とするため、ひとまずここでは本格的に取り上げることは避けて保留としておきたい。

よって以下の本稿では、管見に触れたいいくつかの先行研究を参照しながら、フランスにおけるメゾン・ド・プレザンスの確立過程や思潮史的意義の究明に絞り、ドイツへの影響に関しては次稿に譲りたい²¹⁾。とりわけ先行研究のなかでもフランクの学位論文(1989)²²⁾は、この私的別荘の確立過程や実際の作品など広汎に扱っており多大な教示を得た。さらにイーゼル・ド・フランスに限定して厳密に作品考察をしたクラウゼの最近年の成果(1996)²³⁾や、建築家研究のなかで触れられたもの²⁴⁾、あるいはバロック・ロココの総括的な研究のなかで触れられたもの²⁵⁾、さらに庭園との関連から考察を加えたもの²⁶⁾など、いろいろな成果が参照されることになる。故に本稿は、このような先行研究を有益に援用しながらも、メゾン・ド・プレザンス(以下「別荘」と訳す)がこの激動する過渡期において果たした思潮史的役割を、さまざまな建築書を通して考察しようとするものであり、延いてはそこから十八世紀において従来の古典主義建築思想の厳格な規範性が変貌してゆく史的変遷の動向を見いだそうと目論むものでもある。

2. フランス宮廷社会における「別荘」の確立

——体面重視の公的な空間から快適重視の私的な空間へ——

そこでまず、本論となる「別荘」をめぐる種々の建築書を通した主要概念の考察に入る前に、この確立過程の史的背景を先行研究に基づいて簡潔にまとめておきたい。

ルイ十四世(1638 - 1715)治世の下では、階級位階制度の確立されたフランス宮廷社会を反映して壮大な規模のバロック建築が大都市近郊に広大な幾何学式庭園と調和した構成でもって創り出された。その代表的作品として、建築家ル・ヴォーと庭園家ル・ノートルによる共同設計のヴォー＝ル＝ヴィコントの城館(1656 - 61)や、これに続いて造営されたヴェルサイユの城館が最もよく知られる。ルイ大王は、王都パリを離れ、この自然環境に包まれた壮大なヴェルサイユを舞台に厳しい階級制度や礼節に則った宮廷社会を形成したのであった。このヴェルサイユの建築・庭園や宮廷生活のあらゆる場面が「フランス的ヨーロッパ」と称賛されたこの時代において、各国の王侯貴族の唯一絶対的な模範ともなった。またルネサンス以来イタリアの建築や芸術に大きく影響されてきたフランスがここでその独自性をはっきりと確立し、イタリアを遂に凌駕したと評される。それはこれらの建築作品のほか、ルーヴル宮殿の東ファサードやアンヴァリッドのドームなどの一連の過程を踏まえたなかから、イタリア・バロックの過度な流麗さを洗練させつつ抜けて、古典主義的な厳格さや節度さをフランスのエスプリでもって適切に施しつつ決して優美さを損なうことのない、フランス独自のバロック建築を生み出し得たということにほかならない。この古典主義的バロックの成立には、さらに1671年創設の王立建築アカデミーによる活動も合わせて考慮されねばならないであろう²⁷⁾。

このようなフランス・バロック建築を代表するヴェルサイユ城館は、パリのリュクサンブール宮殿(1615 - 20)などで創り上げられたフランス邸宅の基本形式に則って、とりわけここでは特に窺ったクール・ドヌール(前庭)とクール・ド・ロジ(H型の主屋)とジャルダン(庭園)が同一軸線上に配置され、さらに長大な両翼が付けられた壮大な規模でありかつそれが美しい対称構成をなしている。これに対してヴォー＝ル＝ヴィコントは、従来のフランス邸宅形式に則りながらも建物内部の部屋割りに全く新しい様相をみせている。つまり基本的なクール・ド・ロジが、中世の城館スタイルから発達し定型な部屋割り(Salle - Chambre - Cabinet)が単一に長く連続して並んだ空間構成(appartement simple)であるのに対して、ヴォー＝ル＝ヴィコントの平面は、玄関ホールと楕円広間の組み合わせを中央に置き、その両側に定型な部屋割りの配置を基準としながらも短く巧みにダブルに配置することで、相互の部屋の独立性と快適性を保持する空間構成(appartement double)を生み出しているのである。さらに何よりも特徴的なこの楕円広間の魅力とは、庭園側に張りだして内部と外部との開放的な空間連鎖を創り出していることと、イタリア風広間(Salle à l'italienne)と呼べる二層以上の天井高さや広さを有していることである。この私的な城館としてのヴォー＝ル＝ヴィコントに見られたこれまでにない空間構成は実のところ、イタリアで充分な発達をみせなかったパラッツォのタイプにその源がある。具体的には、イタリア・バロック初期のマデルナとベルニーニとボルロミーニによる三者共作のパラッツォ・バルベリーニ(1628 - 1638)の平面プランに通じるものなのであった。ゆえに未だ

イタリアの影響を残しているとも言える。ともかくこうした新たな傾向はオテル(都市型個人住宅)の平面にも同時に現われ、例えば同じル・ヴォーによる設計のオテル・ランペール(1640 - 1644)を先駆的な作品として見いだすことができ、そして後の建築家クールトンヌによるパリのオテル・ド・マティニョン(1721 - 24)ではいっそう明確になる。このような平面の自由な構成が来たるロココへの活路を開いたと考えてもよい。従って十七世紀末の後期バロックを転起点にして私的な邸館建築から新しい平面構成への試みが、ごく一部ではあるものの徐々に現われてくるのであった。

十八世紀に入ると、ルイ大王治世の終焉とともに絶対主義王権は次第に弛みはじめ、窮屈な礼節によって硬直した宮廷社会から開放されて、優雅で享乐的な私生活を楽しむことに重点をおいた宮廷社会へと徐々に移っていくのである。それはつまり権威や体面を重視した公的な生活態度から、より人間的な快適さを求める私的な生活態度へと変容していくことを意味していた²⁸⁾。そこで私的な享楽生活を求めるようになる王侯貴族にとっては、バロック建築や芸術に見られたような絶対的権力や体面を象徴する壮大な規模のものよりも、もっと人間的に身近で安らぎのある合理的でかつ優美な小規模の住空間が適切なのであった。このような動向を反映して芸術分野では、後期バロックからロココが生起して隆盛してゆくのである。その具体的な特徴は、メソニエやオプノールあるいはボフランなどの作品に代表されるように、貴族の優雅な私生活を演出する室内の快適な空間構成やその装飾、さらに家具や食器類などに見いだせるのである。また「閨房 boudoir」という極めて女性的な住空間が創造されるまでになったことはよく知られている。この貴族の生活態度の変化とそこから生じる建築や芸術への新たな強い要求が、先のヴォー＝ル＝ヴィコントでいくぶん見たように、従来とは異質な新しい部屋の配置による建物全体の空間構成への試みに強く反映してゆくと考えられる。さらに後で考察するように、こうした動向からロココ芸術の本質にも関わり、かつ建築思潮史上決して見落とせない新たな概念が、従来の建築造形原理として知られた純粋な美的概念と同等に大きく注目されてくるのであった。

このようなフランス宮廷社会の変貌と相俟った後期バロックからロココへの芸術上の過渡期に、権威的で形式ばった体面重視の公的な空間よりも、実用的な快適性を重視する私的な空間を尊重した新たな生活意識の現われてくる事態がおおよそ概観された。私的な邸宅についての認識が確立されるのは、階級制度と礼節に縛られた窮屈な宮廷社会からの避難所としての私的な場所という認識がまず起り、その後この私的な場所のもつ意味が多様化することによって徐々に独立してくる過程を経てのことなのである。それを具体的な建築空間として見ると、既に触れたような貴族たち個人の私的な郊外の城館やオテルにおいて、全く新たな空間構成が徐々に現われたのであった。こうした過渡的な宮廷社会に独立してきた私的な邸宅への強い要求に応えるかたちで、快適な部屋割りによった人間的なスケール感覚の優美な邸館建築が全く新しく誕生することになる。これこそが「メゾン・ド・プレザンス」と呼ばれる個人の私的別荘建築の確立なのであった。このフランス語を直訳すれば「享楽のための邸宅」という意味であり、まさに後期バロック・ロココを生きる貴族の趣味や生活態度に相応しく、それを如実に標榜した美しい名称ではあるまいか。「メゾン・ド・プレザンス」にこの過渡

期の様相が顕現していると指摘される所以である²⁹⁾。

次に、以上のような背景から確立した「別荘」が如何なる新しい建築概念を含んでいたのかを、さまざまな建築書から考察したい。

3. フランス啓蒙思想と「別荘」の含む新たな諸概念

3.1) 私邸 - ビアンセアンス - 快適性 - 間取り - ヴァリエテ

フランス後期バロックからロココにかけての建築思潮を考察する上で、まず十七世紀に着目するならば、厳格な古典主義理論の性格が濃厚であり、その論議の中心はウィトルウィウスはもとより、イタリア並びにフランスのルネサンスにおける建築書を基にしたオーダー・プロポーション論であったと、概ね特徴づけることが許されるであろう。建築に完全な「*unité*」や「*symétrie*」を齎らすために、厳密な数値化による比例則を追究したのである。それは殊に王立建築アカデミーを拠点に、その初代教授のN. - F. ブロンデル(1617 - 1686)などの思想に顕著であるが、十八世紀に近づく時代変遷に伴って、この硬直化したアカデミーの周辺から徐々に啓蒙的な建築思想が生まれ始める。

いくぶん遡って十六世紀末、新旧間の宗教戦争の激しかったなかで、ブルボン朝初代国王のアンリ四世(1554 - 1610)は、1598年に「ナントの勅令」によって国内の騒乱を一旦沈静化し、パリ入場を果たし、ここを首都と定めた。王権の絶対的な確立と経済政策を急速に推進するアンリ四世、それに続くルイ十三世(1601 - 1643)の下、首都パリは回復した平和に安堵の色を漂わせつつ、商業発展といったその都市化が進展し始めた。こうしたなかで1623年のル・ミューエ(1591 - 1669)の『万人のための良い建築術』(1647年：増補)³⁰⁾とそれに続く1624年のルイ・サヴォ(1579 - 1640)の『フランス建築』(1673年：増補)³¹⁾の両書は、オテル(都市型個人住宅)設計の教科書本として当時の建築家に広く流布し、公的な宮殿や邸館から峻別させた「私邸 *maison de particulier*」に対する明確な認識を定着させる上での先駆的役割を果たすことになった。特にル・ミューエは、その著書の序文で「私邸のためには、ビアンセアンス(*bienséance*)と快適性(*commodité*)を重視することが求められる。」³²⁾と言及しているのであり、半世紀後の活発な論議の兆しをここで既に見て取ることができる。このビアンセアンスとは、文学や演劇で使われ始めた品性や作法を意味するものであり、それがさまざまな分野に影響を与え、建築においては、持ち主の社会的階級や道徳観に応じて建物のいろいろな条件が制約されるという意味に受け止められ、従来からのデコル論とも結び付けられたものである。従ってル・ミューエは、オテルの設計には住む人々の社会的な地位や人間性が大きく関係し、さらにそれに相応しい建物の用途として住みごちの良さが重視されるべきであって、同じ都市内の公的な建物の条件と混同してはならないと主張したわけである。そしてこのような社会構造の反映としての住居構造を指し示す明確な原理としてのビアンセアンスの認識が広まるとともに、私邸の用途が強く意識されるようになるなかで、快適性の概念が注目され始めた。さらにこの快適性は、個人の邸宅に応じたビアンセアンスから要求される建物全体の条件となり、そのうえ従来の間取りの概念と結びつくことになる。ここにいう間取り(*distribution*)の概念とは、十七世紀までは明らかに美学的な意味に限って使われてきたものである。すなわち比例関係の適切さや美しさといった意味に限定されて用いられてきたも

のなのである。その間取りの概念が快適性と結びつくことにより、いっそうの概念の拡大化がなされ、機能的ないし実用的な意味が盛り込まれることになったわけである³³⁾。間取りに限らず、十七世紀までの主知主義的な建築造形原理は、純粋な美的概念から概ね捉えられてきたが、この十八世紀に到るにつれて少しずつその概念の拡大化や変容を余儀なくされてくるのであった。このように個人の私的邸宅としてのオテル設計から重要視され始めたピアンセアンスと快適性、さらに間取りの概念への認識が、先に触れたル・ヴォーのオテル・ランペールやヴォー＝ル＝ヴィコントなどに見られた具体的な新しい平面構成の展開と連動していったのである。

さらにこのような動向が十七世紀後半以降、ますます顕現化してくる。1668年以降着実に準備され1673年には出版された、クロード・ペロー(1613 - 1688)によるウィトルーウィウス建築書の仏訳において、こうして既に定着を見せていたピアンセアンスの語が造形原理のデコルの仏訳語に充てられた。また硬直化していた王立建築アカデミーにおいてもこのような新傾向は最早無視できず、特に1686年に重鎮のN. - F. ブロンデルが死去した後には、従来の美的論議と相並んで重要な建築原理としてピアンセアンスや快適性、間取りが取り上げられているのを、アカデミー会合の議事録に見い出すことができる³⁴⁾。この保守的なアカデミーのなかでもピエール・ビュレ(1639 - 1716)やアントワヌ・デゴデ(1653 - 1728)が、とりわけこの新たな概念の導入に率先的であった。まずビュレといえ、N. - F. ブロンデルの高弟であることから厳格な古典主義の実践的建築家として、さらに1691年に出版された実用的な建築知識に関する『実践的建築』の著者として、従来から広く知られていたと思われる³⁵⁾。しかしビュレの新たな建築美に対する見解は、その著書のなかでピアンセアンスの重視や快適性と造形との調和が生かされた間取りを強調するところにはっきりと見受けられる。その上でビュレは思想と結び付いた建築作品を数多く設計したのであった³⁶⁾。また一方で、1719年に二代教授ラ・イール(1640 - 1718)の後任となったデゴデは、アカデミー学校での「建築の快適性についての理論」³⁷⁾という講義において、建物のプロポーションと間取りの関係からこの新たな建築原理としての快適性について講じたのであった。こうしたアカデミーの要職にある人物からの影響は、この後の史的展開において重大な意義を有したものと考えられる。

こうした時代の着実な推移を踏まえて十八世紀に入ると、公的な建物と明確に区別された私的な邸宅をめぐる新たな諸概念が、種々の建築書における共通した問題となったことは最早疑いえない。それはつまり、1702年出版のフレマンによる『建築批評覚書』³⁸⁾や続く1706年出版のコルドモアによる『新建築総論』(1714年：第二版)³⁹⁾、さらに1714年のル・クレール(1637 - 1714)の『建築論考』⁴⁰⁾のいずれの著作においても、階級制度という社会構造と繋がった建物の目的や用途に相応しい条件の捉え方、すなわち私邸に要求されるピアンセアンスや快適性、間取りの概念は、繰り返して最も重要な課題として触れられたのである。フレマンは、従来のオーダー論が建築にとって決定的な重要性を有するものでないと言ひし、従来の理論に批判を与えるとともに、真の建築を生み出すのは、身分の階級秩序に合致する条件としてのピアンセアンスであると規定した。次にこのフレマンに強く影響を受けたコルドモアの著書は、さらに後のJ. - F. ブロンデルやロジエなどへ影響を与え、加えてドイ

ツ・フランスの啓蒙的な建築思想を伝えるのにも大きな役割を果たすこととなった⁴¹⁾。コルドモアは、建築の重要な原理としてピアンセアンスと間取りを挙げ、その実践的な根拠として快適性を考慮することが重要であると強調した。さらに建物の「公」と「私」のそれぞれの性質について述べ、象徴性や敬愛心、壮麗などが要求される公的な建物に対して、私的な建物の性格にはピアンセアンスが何よりも重要であると指摘した。また快適性を目的とし、ピアンセアンスの原理に則った建物の性格をより明確にするためにも、建物を公的なものと私的なものに分けることが必要であったとも言える。このようにコルドモアは、人々の階級に適切に応じた私的な邸宅において、ピアンセアンスや間取りの新たな概念と、さらにその空間構成上の根拠ともなる快適性との関わりを明確にしたのである。さらにル・クレールは、著書の冒頭で「建物の設計において部屋の間取りで注意すべきことは、その快適性と利便性、さらに建物の外観の美しさが一致することである。」⁴²⁾と適切に論じた。

そしてさらには、このような新たな建築の思想性が、建築書の表題においても如実に提示されるまでになった。例えば1727年のジャン・マロ親子による『フランス建築あるいはパリの教会、公邸、城館、私邸の図面集』⁴³⁾や1728年のティエルスレ(? - 1769)による『現代建築あるいは万人のために公邸と私邸が良く建てられる術』⁴⁴⁾がその明らかな証左であり、私邸に対する認識の確実な定着が疑いなく読み取れる。殊にティエルスレはその書の序で、従来の多くの建築書がオーダー論に偏重してきたと批判し、住む人の要望する住みごちの良さにいっそうの関心が寄せられるべきであると言及するのだった。さらにその上最早触れるまでもなろうが、この後に続く種々の代表的な建築書において、例えば1745年のポフラン(1667 - 1754)の『建築書』⁴⁵⁾や1753年のロジエ(1713 - 1769)の『建築試論』(1755年：第二版)⁴⁶⁾、1780年のル・カミュ・ド・メジエール(1721 - 1793)の『建築の精華』⁴⁷⁾などにおいて、私邸に求められる原理としてのピアンセアンスや間取り、快適性の新たな諸概念は、いっそうの論議を呼び起こしていったのである。

以上のように考察してきた建築書に共通した基底には、十七世紀までの厳格な古典主義理論に内在する「sec」な性格、つまり建築造形の調和や比例をあまりにも数値的に探究する傾向から生じる「温もりや潤いのない冷たさ」への批判が含まれていたことを、なおここで付け加えて指摘せねばならない。バロック時代では、かかる古典主義理論に基づき、絶対主義による階級制度を反映した「偉大さgrandeur」を象徴する壮大な城館が幾多も実現し、人間への威圧的な存在感を表現したのである。それに対して後期バロック・ロココは、人間的なスケールの私的な邸宅に、温もりある安らぎや潤いを持たせた住空間への強い要望が生まれたのであり、それはつまり「sec」な性格から「ヴァリエテ (variété)」という性格への移行であった⁴⁸⁾。このヴァリエテとは、すなわち「快活さgaieté」を備えた「多様ななかの統一 (l'unité dans la variété)」を意味する性格であり、また「unité」や「symétrie」に収斂する造形的多様さでもあった。ゆえにそれは完全な古典主義精神からの離脱を意味するものではなかったにしても、従来の数値的規則性による厳格な古典主義が変貌する契機を齎したことは違いなかった。ヴァリエテは後期バロック・ロココを大きく性格づけるものである。

従って十七世紀後半から十八世紀への過渡期に見いだされた私邸

の独立にともなう新しい建築の諸概念とは、ルイ大王治世の終焉とともに王侯貴族に現われる趣味や美意識、生活態度などの推移と連動して成立したのである。要約すれば、われわれはこうして従来のオーダー論中心だった古典主義建築理論の変容を迫る契機を有する史の変遷の過程を、具体的な建築書を通して考察したのである。この新しい多義的な思想性を孕む「私邸 maison de particulier」の確立こそが、実はそのまま「別荘 maison de plaisance」の誕生へと繋がっていくのであった。言い換えれば、新たな諸概念を含む「私邸」の定着が、来たるべき「別荘」の確立への思想的な下地を培っていたのであり、別荘という建築の下にいくつもの啓蒙的な概念が取り纏められて包摂されることになったと考えてもよい。さらにこの単なる私邸から具体的な別荘への確立に到る過程に合わせて、新しい諸概念のなかでも特に重要なピアンセアンスは、その意味するところを受け継ぎつつ、いっそう建築に相応しい概念としての「コンヴナンスconvenance」に変容していったのである⁴⁹⁾。

このように数々の建築書が問題としてきた諸概念を取り纏める役割を担い、過渡的な啓蒙時代における宮廷社会からの要請も与して誕生したのが「メゾン・ド・プレザンス」と呼ばれる貴族の私的な別荘なのであった。この別荘をめぐる思潮史的考察をいっそう具体的に究明する上で決定的に重要な、十八世紀フランスを代表する建築理論家J. - F. ブロンデルの著書を次に取り上げたい。

3.2) J. - F. ブロンデル著『別荘の間取りについて』

ジャック＝フランソワ・ブロンデル(1705 - 1774)による最初の著作『別荘の間取りと建物一般の装飾について』⁵⁰⁾は、1737年と翌年に分けて全二巻本で出版された。それは、これまで考察してきたいくつかの新しい建築概念を総括する内容を有し、さらにいっそうの思想的展開をも孕んでいたのである。「別荘の間取り」という言葉がまさに表題に充てられた唯一の著書であり、また冒頭の献辞において「現代の趣味による建築論」としてその内容が明確に位置付けられているように、当時の重大な建築的課題としての別荘を通して、広く建築家や芸術家に「新しい精神esprit de nouveaux」を鼓舞させようとする、ブロンデル自身の斬新な試みが意図されていた。よってこの時三十二歳の若きブロンデルは、まさに啓蒙的精神をもって新たな建築思想の活路を開らかんと目論んでいたものであり、この目論見は、数年後の芸術学校開校(1743)という大きな構想へと着実に繋がっていったと考えられる。

ブロンデルの別荘についての論考を考察する手始めに、それに先んじてこの用語に明確な概念規定を初めて与えた、A. - C. ダヴィレ(1653 - 1700)による定義にまずは触れねばなるまい。王立建築アカデミー学校の最初の学生となったダヴィレが、1691年に出版した二巻本の名著『建築講義』には「建築用語辞典」が含まれている。これは後の十八世紀全般においてフランス国内外に広く知れわたり、当時の建築家にとっての教科書的作用を担った重要な著書の一つであったが、この辞典の項目「別荘」をここで引用する⁵¹⁾。

別荘とは、田園のなかに建つ貴族の城館あるいは私的な邸宅のことである。ここでは庭園の美化による清潔な住まいから、美しい季節の時期にわたって快適な滞在が提供される。この名称は貴族の享乐的な生活から名づけられた。またこれに相当する

いろいろな呼び名がほかにあつて、フランス各地の Cassine やプロヴァンスの Bastide、イタリアの Vigna、エスパニアとポルトガルの Quinta である。さらに古代ローマの Villa やウィトルウィウスの Aedes pseudourbanæ もこれに相当するものである。

このダヴィレによる別荘の定義は実に適切であり、これは概ねそのまま十八世紀のブロンデルなどに引き継がれてゆく。ここで触れられた立地条件としての田園と建物やあるいは庭園と建物の密接な関わりについては、既にバロック時代においてその造形的な探求がなされていたが、「清潔な住まい」や「快適な滞在」という記述にこれまでの考察からもこの過渡的な時代の思想性が汲み取られているといえよう。ただダヴィレは辞典の項目ということもあつて別荘の大まかな性格について言及したにすぎず、思想的な考察や具体的な計画については何ら触れることはなかった。ともかくこれらの事柄を念頭に置いて、ブロンデルの著書に踏み込みたい。

この二巻に分かれたブロンデルの著作の全体構成について、まずその第一巻では「建築一般についての予備的な考察」と題した序論が最初に置かれ、さらに別荘の思想的内容や設計構想が五つの計画案を提示しながら具体的に論及されている。そして第二巻では別荘を取り囲む鑑賞用庭園(Jardin de propreté)の詳細な装飾が、多くの図版を入れながら説明されている。別荘の建築をめぐる新たな諸概念に視点を限るならば、第一巻の序論や計画案が殊さら参照されることになり、実際のところ第二巻では別荘の思想や建築自体に関わることはあまり見当たらない。なお付け加えると、この執筆に際してブロンデルは、先にも触れたフレマンやコルドモアの建築書、さらに庭園に関してはデザリエ・ダルジャンヴィル(1680 - 1765)による『庭園の理論と実践』(1709)⁵²⁾を特に参照していた。

そこでブロンデルは、この第一巻の序論で別荘の思想的な重要性をめぐる、まずその概念的な根拠を明確に与えている。現代の建築論的課題として取り上げられた別荘という個人の私的な邸宅を、住まいの快適性と結びついた間取りの術から捉えなおし、さらに十七世紀末から活発に論議されてきた新たな建築の諸概念をここで総括しようと試みるのである。従って別荘の間取りや装飾において試みられた快適性や利便性と、空間構成の適切な美しさや内外の装飾とを同時に満足させるということ(多様ななかの統一=ヴァリエテ)は、建築の三原理のうちの「用」と「美」の同等な相互関係の調和を問題としていることになる。それはつまり十八世紀の新たな建築が、美しいファサードを意図したものの快適性や利便性を無視してきた十七世紀までの偏重した建築思想とは全く異なっており、本来の建築原理に則った正当な立場を明確に取るべきことを強く説いていると言えるのである。さらにブロンデルは、建築思潮史上においても全く新しい概念でもある「エコノミー-économie」の重要性について触れるのであった⁵³⁾。郊外の田園に建てられる個人の別荘に、従来のような権威や体面を重視するあまりに過剰な装飾をとまなう大規模な建造のための膨大な出費はさけるべきであるとし、儉約な費用の当て方やそれに相応しい設計術を強調するのであった。このような建築術にとっての「エコノミーな精神 esprit d'économie」とは、単に実用的な費用や建造の面からだけでなく、さらにこの別荘という建築にこそ求められる快適な安らぎが演出される住空間を実

Fig. 1) 鑑賞用庭園 (Jardin de propreté) における別荘の配置図

現する上では不可欠なのである。権威を象徴する大空間は公的な儀式や社交の場には適切であっても、気ままにくつろげて身体を安らげつつ私的な生活を優雅に楽しむ住空間としては全く相応しくないゆえに、別荘には人間的なスケールによる小規模な空間構成がその用途を満たす設計条件として必要なのである。ゆえにこうしたブロンデルの唱えるエコノミーな精神もまた、別荘あるいは私邸が要請するピアンセアンスに充分適っているのである。

さらにブロンデルの考える別荘の条件には、広大な自然環境に恵まれた田園のなかに庭園とともに計画されることの重要性も含まれている。それは前時代のように別荘の立地する環境や庭園の美しさが造形的に建築と調和することだけに求められるのではなく、自然や庭園の空間構成が別荘内部の間取りと連鎖することで、いつその快適さが満たされるという認識からであり、自然・庭園の美化が別荘における住まいの美化へ、さらにはそこに住まう人間存在そのものの美化へと直接的に呼応し合い、その有意義な相互の関連性が考慮されているのであった⁵⁴⁾。このようなことからブロンデルは著書の至る所で別荘を「田園邸宅 maison de campagne」という表現で頻繁に置き換えたわけである。ゆえにバロックにおける祝祭空間の演出構成からみた建物と庭園の造形的な関係以上に、快適性の概念を根拠にしていっその両者の総合性が重要視されるのであった。これも実にヴァリエテの反映であった。別荘の間取りと庭園の分割構成の調和ないしは統一、言い換えると建物内外の間取りと装飾との一致については、かかる視点から強調されたのである。

従って以上のようなブロンデルの別荘建築は、さらに具体的な五つの計画案によって具現化を見ることになる。より正確に言えば、五つの案をそれぞれ対照させながらブロンデルの考える別荘を詳しく説明して、最もその意図にそった第四案(上の挿図)を最終的には提示することになる。また後のブロンデルがその大部の著作『建築講義』第三巻(1772)において、十七世紀のフランス建築からヴォー

ール＝ヴィコントの城館を別荘の原型として唯一つ取り上げていることを考慮せずとも、これまでの考察から計画案のプランやファサードは興味深い。パリの近郊に構想されたこの五つの計画案の内、最初の三つは従来の城館建築を引き継いでおり大規模な計画案であって、ブロンデルの新しい着想とは全く一致しない。次に続く第四案の「エコノミーな邸宅 maison d'économie」と名付けられた構想こそ、ブロンデルの真の意図にそって計画されたものである。全体の大きさは 120 ピエ (1 ピエ = 0.324m) となっており約 40メートルで、マンサード屋根による二階建ての規模でシンプルにまとめられている。正面ファサードは、貴族の身分を示す紋章の入ったペディメントを付けていくぶん厳格な高貴さを示しながら、逆の庭園側ファサードにはペディメントはなく狩猟を物語るように動物の彫像による装飾が若干施され、全体的には節度ある優美さや簡素な気品の漂うフランス的な趣味によって統一されている。この建物全体が持つ性格は、ヴァリエテの精神から生み出されたものであろう。また平面プランは、玄関ホールと円形状の広間が中央に位置するアパルトマン・ドゥブルになっており、その間取りは庭園の空間構成と合致する。円形状の広間の天井は一層分であり、ヴォーール＝ヴィコントのようなイタリア風広間は敢えてここでは避けられている。それは最後の第五案の「イタリア風の建物」と対比されていることから明らかなように、これは規模的には第四案とほぼ同等なものの、イタリア風の広間とファサードは快適性やエコノミーを欠くために個人の私邸には相応しくないと批判して、結局のところ五つの計画案のなかの第四案が、ブロンデルの唱える別荘となるのであった。

このようにしてブロンデルの最初の著書によって思想と制作の両面にわたって決定づけられた別荘には、快適性や間取り、エコノミーという新たな建築概念がすべて包括され、また後期バロック・ロココの特徴であるヴァリエテの性格も見いだすことができる。その上さらに、これらの諸概念を密接に繋ぎ合わせる重要な原理として

Fig. 2) 断面図

Fig. 3) 庭園側ファサード

Fig. 4) 一階平面図

J.-F.ブロンデルの「別荘 Maison de plaisance」
第四案「エコノミーな邸宅 Maison d'économie」

図版出典 (Fig. 1 ~ 4)

J.-F. Blondel : De la distribution des maisons de plaisance
et de la décoration des édifices en général.
1vol., p145~168, (1737) Reprint, 1967

ピアンセアンスとともにコンヴナンスが当てられていた。これについては後年のブロンデルが強調することになる「コンヴナンスの精神」が既にこの著作に現われていたのである。こうしてブロンデルによる別荘とは、およそ半世紀以来論議されてきた新しい建築の諸概念を一先ず総括した意義を持つものとして捉えることができるのであり、さらに当時のフランス啓蒙主義建築思潮の一つの重大な成果として評価できる。そして数年後の1743年に出版された、C. - E. プリズー(1680 - 1754)による多くの計案を含む『田園邸宅を建てる術』(全二巻)⁵⁵⁾の内容にはっきりと読み取れるように、ブロンデルが思想と制作とともに規定した別荘建築の影響は、フランス国内はもとより隣国のドイツへと着実に広まっていったのである。殊にそのドイツでの受容には、旧体制のアカデミーが根強く君臨するフランス本国以上の決定的な影響を齎したのであり、その詳細については、ブロンデルの高弟などによるドイツでの啓蒙的な建築活動が雄弁に物語っているのである。

4. 結——「別荘」の建築思潮史的意義

十七世紀末から十八世紀初期にかけてのフランス宮廷社会において、階級制度や礼節によって縛られた公的な生活からの逃避場所として生まれ始めた私的な住空間への強い要請が、徐々に高まり建築的課題として把握されるに依じて、「別荘 Maison de plaisance」という新たな個人の建築空間の確立へと到ったのである。それは、

ヨーロッパ近代の躍動という時代の大きな動向とも重なって、新たな社会構造を反映させた諸概念による啓蒙主義建築思潮の変遷と密接に連動していた。宮廷社会のメンタリティとしてのピアンセアンスが個人の私邸の用途に対応し、そして従来の間取りの概念が快適性と結び付き、さらにその諸々の概念が有する問題性は、当時の新鋭の建築家たちによる建築書において的確に論及されたのである。これによって硬直化していた「sec」な古典主義思想の厳格さが揺さ振られ「variété」という性格をもつ建築の精神性への変容をも生じたわけであった。そしてこれらの諸概念にエコノミーの概念も加えて「別荘」の建築の下に総括したのは、J. - F. ブロンデルによる最初の著作なのである。このようにフランス後期バロック・ロココにおける趣味や生活意識を顕に標榜し、さらに新たな建築の諸概念と密接に結び付いて確立したという事態の究明から、「別荘」の建築思潮史的意義は十分に明らかにされたことになる。なお付け加えると、次の新古典主義への一つの端緒を「別荘」をめぐる建築思潮から読み取ることもそう困難なことではない。

最後に本稿にて着目してきた諸概念について、それらが次の十九世紀後半以降に台頭する近代主義思想の一連の枠組みを形成するのに大きく寄与したことを考慮するとき、この思潮史的意義が十八世紀に限定できないことも触れておかねばなるまい。このとき、かつて森田慶一がその『西洋建築思潮史』のなかで建築造形原理の6つの概念を「内在的原理」と「外在的原理」とに整理して構造化した

論点が、ここでの有効な洞察を導いてくれる。これまで言及してきた諸概念はすべて、森田の主張する外在的原理に相当することになる。するとルネサンス以来の内在的原理としての古典主義建築思想とは、十七世紀まで明らかにその純粋な美学的探究によって史的展開を成し遂げてきたのが、十八世紀以降の社会的要素と結び付きやすい外在的原理の認識の高まりに応じて変容せざるを得なくなり、十九世紀以降にはその内部から完全に解体し始めることになる。内在的原理は徐々に拡大化する外在的原理との矛盾し合う性格の顕在化とともにその相剋的対立を繰り広げながら、さらに建築の三様態とも複雑に相関しつつ、全く新たな建築世界の再構築が躍動する近代という新たな時代の怒濤のなかで模索され続けるのであった。ここから「別荘」をめぐる諸概念の孕む問題性とは、本稿における十八世紀啓蒙の時代を超えた多様な広がりと深さを有しており、その建築思潮史的探究への可能性がよりいっそう開かれるのである。

従って次稿では、このようなさまざまな問題性を含む「別荘」がフランスからドイツへ如何に受容されていくのかを考察し、啓蒙主義建築思潮研究の意義と可能性をさらに探ってみたい。

【 註 】

- 1) J. Burckhardt: Briefe an einen Architekten, 1870-1889, München 1912, s6
- 2) A. Zahn: Barock, Rokoko und Zopf, in: Zeitschrift für bildende Kunst, 8, 1873
- 3) R. Dohme: Studien zur Architekturgeschichte des 17. und 18. Jahrhunderts, in: Zeitschrift für bildende Kunst (Lützow), 1878
- 4) H. Wölfflin: Renaissance und Barock (1888), 8. Auflage, Basel 1986
邦訳『ルネサンスとバロック』(上松祐二訳)中央公論美術出版 1993
- 5) C. Gurlitt: Geschichte des Barockstils, des Rococo und Klassicismus in Italien, Belgien, Holland, Frankreich, England, Deutschland, 3. Bd, Stuttgart 1887-89
- 6) W. Lübke: Geschichte der Renaissance in Frankreich und Deutschland, 3. Bd (1875), 2. Aufl., Berlin 1885
- 7) A. Riegl: Die Entstehung der Barockkunst in Rom, Wien 1908
リーグルのバロック芸術に関する講義は、1894年の冬期から始まり、最期の晩年まで続き、その内容が死後ドヴォルジャークの手により出版された。
- 8) A. Schmarsow: Barock und Rokoko, Leipzig 1897
- 9) Udo Kultermann: Geschichte der Kunstgeschichte, München (1990) 1996, s131
邦訳『美術史学の歴史』(藤・高坂共訳)中央公論美術出版 1996, p226
- 10) S. Giedion: Spätbarocker und romantischer Klassizismus, Diss, München 1922
- 11) Max von Boehn: Deutschland in 18. Jahrhundert, Die Aufklärung, Berlin 1922
邦訳『ドイツ十八世紀の文化と社会』(飯塚ほか訳)三修社 1984
- 12) D. Frey: Beiträge zur Geschichte der römischen Barockarchitektur, in: Wiener Jahrbuch für Kunstgeschichte, 17, 3, 1924
- 13) N. Pevsner: Leipziger Barock, Diss (1924), Dresden 1928
- 14) H. Sedlmayr: Fischer von Erlach der Ältere, Diss, München 1925
: Österreichische Barockarchitektur, 1690-1740, Wien 1930
- 15) ヴェルフリンの美術史研究に真っ向から対立して論争を起こしたこと有名なイタリアの哲学者クローチェが、1925年にドイツ語による『バロックの概念』を出版しているのも付け加えておきたい。 Benedetto Croce: Der Begriff des Barock, Zürich 1925
- 16) K. Cassirer: Die ästhetische Hauptbegriffe der französischen Architektur-Theoretiker von 1650-1780, Diss, Berlin 1909
森田慶一は『西洋建築思潮史』(私家版 1974, 後に『建築論』東海大学出版会 1978に所収)のなかの第5章「近世フランスの建築思潮」をこのカッシーラーの学位論文に基づいて執筆した。そしてこの森田によつて切り開かれた日本における西洋建築思潮研究は後に、白井秀和『フランス古典主義・啓蒙主義建築思潮研究』京都大学学位論文 1986によっていっそう徹密さを加えて引き継がれた。
またこのカッシーラーの前の1907年には同じヴェルフリンの下から、ヴォーリンガーの学位論文『抽象と感情移入 Abstraktion und Einfühlung』が生まれた。このような両者の美的概念に関する研究とは、数年後の1915年に発表された『美術史の基礎概念』を考慮すると当時のヴェルフリンの問題意識と何らかの影射関係があるのかも知れない。
さらに付け加えて西洋建築通史を独自に二元論で考察したことも知られる森田慶一の視座と、このヴェルフリンの『美術史の基礎概念』で提示された「対概念」による考察方法とは大きく関係するのではないと思われる。
- 17) E. Kaufmann: Die Architekturtheorie der französischen Klassik und des Klassizismus, in: Repertorium für Kunstwissenschaft, 64, 1924
この論文については、カウフマンの邦訳『ルドルーからル・コルビュジエまで』(白井秀和訳、中央公論美術出版, 1992)のなかの訳者付論を参照されたい。
なおこの論文以前のカウフマンに、学位論文『建築家ルドルーの理想と古典主義の美学 Die Entwürfe des Architekten Ledoux und die Ästhetik des Klassizismus』のあることが、シュロツァー (註19, p583.) によって紹介されている。
- 18) C. Habicht: Die deutschen Architekturtheoretiker des 17. und 18. Jahrhunderts, in: Zeitschrift für Architektur und Ingenieurwesen, 21(1916), 22(1917), 23(1918)
- 19) 若干付け加えると、現在では忘れられているが、カッシーラーの学位論文以前にも建築思潮の研究が皆無ではなく、次の文献が一部の研究者のなかで知られていた。
C. Berling: Entwicklung der Saulenordnungen Vitruvs bei den französischen und deutschen Theoretikern des 16.-17. und 18. Jahrhundert. (1870年代執筆で未発表).
P. Schumann: Barock und Rokoko, Studien zur Baugeschichte des 18. Jahrhunderts mit besonderem Bezug auf Dresden. Leipzig 1885
またヴィーン学派の重鎮として知られたシュロツァーの大著『美術文献』(1924)は、古代から近代に到る美術分野の理論書を幅広く徹底的に考察した膨大な内容であって、

- 建築思潮研究へも影射を与えた。J. Schlosser: Die Kunstliteratur, Wien (1924), 1985
- 20) H. Bauer und H. Sedlmayr: Rokoko, Köln 1991 に付けられた詳細な参考文献表が役立つと思われる。
  - 21) フランス啓蒙主義建築思想のドイツへの影射に関しては、別の視点から既にくつかの拙稿にて若干考察したことがあるので参照していただきたい。
市川「ヴァイマル精神と古典主義建築の性格論」
日本建築学会計画系論文集 482号, p229-238, 1996, 4
市川「ヴァイマル古典主義建築の展開」
日本建築学会計画系論文集 505号, p227-234, 1998, 3
市川、白井「ルドルーのカッセル凱旋門計画案をめぐる」
福井大学工学部研究報告 45巻 1号, p101-115, 1997
  - 市川「ヴァイマル精神の建築思潮研究」福井大学学位論文 1996
  - 22) D. von Frank: Die maison de paisance, Diss (1987), München 1989
  - 23) K. Krause: Die Maison de plaisance, München 1996
  - 24) K. E. Zinkann: Der Typ der Maison de Plaisance in Werke von Johann Conrad Schlaun (Schlaunstudien IV), Münster 1989
Stadtmuseum Düsseldorf (Hrg.): Schloss Benrath und sein Baumeister Nicola de Pigage, Düsseldorf 1996
H. Lorenz: Das Lustgartengebäude Fischers von Erlach. Variationen eines Architektonischen Themas, in: Wiener Jahrbuch für Kunstgeschichte, 32, 1979
  - 25) H. Rose: Spätbarock, München 1922
H. Bauer: Barock. Kunst einer Epoche, Berlin 1992
W. Hansmann: Barock. Deutsche Baukunst 1600-1760, Leipzig 1997
  - 26) I. Dennerlein: Die Gartenkunst der Régence und des Rokoko in Frankreich, Diss. (1972), Worms 1981
  - 27) H. Schölller: Die Académie Royale d'Architecture, 1671-1793. Anatomie einer Institution, Köln 1993
  - 28) エリアス(波田ほか訳)『宮廷社会』法政大学出版局 1981 のなかの第3章「社会構造の指紋としての住居構造」における家屋の威信価値と実用価値を参照。
  - 29) H. Junecke: Die Maison de Plaisance, in: Sitzungsberichte der Kunstwissenschaftlichen Gesellschaft zur Berlin, 10. April, 1953, s26-27
  - 30) P. Le Huet: Manière de bien bâtir pour toutes sortes de personnes, Paris 1623
  - 31) Louis Savot: L'architecture française, Paris 1624
  - 32) P. Le Huet, ibid., vgl.; K. Cassirer, ibid., s26
  - 33) 十八世紀フランスにおける「間取り」の重要性については、白井秀和「フランス十八世紀の建築における間取りの概念について」福井大学工学部研究報告 45巻 1号, 1997を参照されたい。
  - 34) H. Schölller, ibid., s119-122
  - 35) P. Bullet: Architecture paratique, Paris (1691) 1762
クルト・カッシーラーはビュレの著書について実用的な知識のものという以上の捉え方をしなかったが、カウフマンはビュレの新しい建築美についての認識を重要視した。
vgl.: K. Cassirer, ibid., s25, E. Kaufmann, ibid., s212
  - 36) K. Krause, ibid., s222-237
  - 37) H. Schölller, ibid., s199-201
H.-W. Kruft: Geschichte der Architekturtheorie. München 1991, s153-154
  - 38) H. de Frémin: Hémioires critiques d'architecture contenant l'idée de la vraie et de la fausse architecture, Paris 1702
  - 39) J. L. de Cordenoy: Nouveau traité de toute l'architecture. Paris (1706) 1714
  - 40) S. Le Clerc: Traite d'architecture. Paris 1714, Deutsche Übersetzung 1759
  - 41) P. Schumann, ibid., s8-
  - 42) S. Le Clerc, ibid., p2-, vgl.: E. Kaufmann, ibid., s218
  - 43) Jean et Daniel Harot: L'architecture française ou recueil des plans..., des églises, palais, hôtels et maison des particulières de Paris, Paris, 5. vol. 1727-37
  - 44) A.-C. Tiercelet: Architecture moderne ou l'art de bien bâtir pour toutes sortes de personnes tant pour les maison de particulières que pour les palais, Paris 1728
  - 45) G. Boffrand: Livre d'architecture, Paris 1745
  - 46) H.-A. Laugier: Essai sur l'architecture, Paris (1753) 1755
Deutsche Übersetzung 1989, 邦訳『建築試論』(三宅理一訳)中央公論美術出版 1986
  - 47) Nicolas Le Camus de Mézières: Le Génie de l'architecture, ou l'analogie de cet art avec nos sensations, Paris 1780, Deutsche Übersetzung 1789
  - 48) K. Cassirer, ibid., s40, 森田前掲書 p213-214
この史的変遷の徹密な考察については、白井秀和「ピアンセアンスとコンヴァナンス」日本建築学会論文報告集 333号 昭和58年11月を参照されたい。
  - 50) J.-F. Blondel: De la distribution des maison de plaisance et de la décoration des édifices en général, 2. vol., Paris (1737-38), Reprint: 1967 ブロンデルについては、白井秀和訳『ブロンデル建築序説』中央公論美術出版 1990 に詳しい。
  - 51) A.-C. Daviler: Cours d'architecture qui comprend les ordres de Vignole, vol. 2, p656, vgl., B. Köhler: Architektur ist die Kunst, gut zu bauen, Berlin 1997
  - 52) A.-J. Dézallier d'Argenville: Le Théorie et La Pratique du Jardinage, Paris (1709), 1747, vgl., I. Dennerlein, ibid.
  - 53) ブロンデルは「エコノミー」をここでは単に儉約という意味で使っているが、実はこのフランス啓蒙主義期において重要な役割をもった概念であることが指摘されている。これについては白井秀和『近世・近代フランス建築理論における「構成」概念についての基礎的研究』平成七・八年度科研報告書 1998を参照されたい。
  - また、これまで建築思潮あるいは建築論において、「Architecture」の語源を古代ギリシア思想にまで遡って考察する視点は既に定着しているが、これと対照的な概念にも相当するエコノミーの語源「oikonomia オイコノミア」については建築論的考察が全くされていない。「Architecture」の語源を探究するいま一つの視点として、オイコノミアとの対比的な考察が必要なのではないかと考えられる。取り敢えず次の論文が参考になる。関根皓光「オイコノミア思想の一原像」上智大学人間学紀要 22, 1993
  - 54) 「美化(仏語: embellissement, 独語: Verschönerung)」という語については、啓蒙主義建築思潮における重要な概念として別稿にて大きく取り上げてみたい。例えばロジェがその『建築試論』において「都市と庭園の美化」について論及しているのが、これに関して若干考察を加えてみた。市川「新古典主義者ロジェから見たヴェルサイユ庭園」日本造園学会関西支部研究発表要旨(1998)を参照されたい。
  - 55) C.-E. Briseux: L'Art de bâtir des maison de campagne. 2. vol., Paris 1743

(1998年9月9日原稿受理, 1999年4月23日採用決定)